

ヒグマ対処法引率者検討部会（拡大版） 実施概要（未定稿）

- 【日時】 平成22年1月15日(金) 13:30～15:30
- 【場所】 知床世界遺産センター レクチャールーム
- 【出席者】 (実験参加引率者) 岡崎・寺田・鈴木・松田・関口・綾野
 (斜里町観光協会) 上野・佐々木・青木
 (環境省) 則久・中村
 (北海道) 大館・樋口・榎塚
 (自然公園財団) 金盛
 (知床財団) 増田・葛西・寺山

*敬称略

【開催の背景】

2009/12/14の五湖利用のあり方協議会にて、ヒグマ活動期の基本ルールとして「ヒグマに遭遇したら引き返し」という変更案を協議したが、「基本ルールの変更はちゃんと部会で協議した結果なのか」「部会での議論は行政からの一方的なものであった」「行政とガイドの信頼関係の再構築をして、再協議して欲しい」等の意見が多数出た。

これを受けて、観光協会に協力を要請し、関係者の招集や意見収集をお願いした上で引率者検討部会の拡大版として意見収集の場を持った。

【意見の概要】

- 「ヒグマに遭遇したら引き返し」という表現は、マスコミにも誤解を生み、利用者にも説明できない。公開する文言からは外して欲しい。
- 安全が第一であることは理解できる。「遭遇したら引き返し」では駄目だが、それは「遭遇しても進む」には決してならない。基本的にはリスクを避けるために、引き返すのが基本的な行動だが、あくまでガイドが判断して対処するとしなければ、制度として成り立たない。
- H21.6月の実験及び認定研修は非常にうまくいった、というのがガイド側の評価である。できるだけ実験時の考え方を継承して発展させていってほしい。
- 全国的にも先進的な取り組みである。引率者の認定は協議会が行うなど、地域全体の協力でも新制度を積み上げていかなければならない。

【協議内容】

1) 「遭遇したら引き返し」という基本ルールの行政提案について

- この文言は取り下げてほしい。
 - ・ 新制度の趣旨として、行政と地域の協働作業による運用であるべきなのに、あまりに一方的である。
 - ・ 少なくとも一部のガイドは、単純に引き返し以上のことができるレベルにあると考えられる。
 - ・ 実際の第一遭遇者は必ずガイドであり、その後の動きについては、ガイドと管理側の協働作業になる。現場で活動するガイドの経験と、ヒグマ対策で蓄積された知識を提案しあい、積み上げる体制が必要である。そういったガイドとの協働作業を否定する印象を受ける文言であり、適当でない。
 - ・ ヒグマとの折り合いをつけ、共存の道を探る極めて先進的な利用制度であるのに、単純に

- 「いたら利用できない」と理解される恐れがある。趣旨を説明する上でもマイナスである。
- ・ ルールの詳細の中に、危機回避のために引き返す場合があることを明記してある。これで十分で、この文言をあえて前面に出す必要は無い。

- 安全第一であることは理解している。
 - ・ 先進的な試みであり、事故は決して起こせないことは、理解している。
 - ・ 観光としても、ヒグマに関する事故は絶対に避けなければいけない。
 - ・ 「遭遇したら引き返す」では駄目という主張は、「遭遇しても進む」ではないことを理解してほしい。9割以上のケースで実際には、遭遇したら引き返すことをガイドは選択するだろう。しかし中には、そのまま進んだ方が安全なケースもあり得る。その場合ガイドは、例えルールを破ることになっても、安全な方を選択する。その余地は必要。
 - ・ 判断基準をすべて網羅してルールにすることは実際的でないし、マニュアル化することはむしろ危険で、ガイドが判断しなければならない部分が必ず残る。
 - ・ お客さんに納得してもらうためにも、状況を「ガイドが判断して」対応するという説明が必要。
 - ◇ （行政から）

ヒグマ遭遇時の誘導を容易にするためにも、この制度は「ヒグマを見に行くためのもの」ではなく、「ヒグマに出会わないようにしながら（共存しながら）自然を採勝するもの」であることを明確にすることが必要。

- H21年6月実験及び研修
 - ・ ガイドの皆さんの評価は非常に高い。うまくいった、という評価だ
 - ・ できるだけ実験時の考え方を継承して発展させていってほしい。

2) 認定引率者のレベルについて

- どのような認定レベルが必要か
 - ・ 引率者は、遭遇したグループの危機回避はもちろんだが、歩道上の他のグループの危機回避にも責任を持つシステムである。個人としてはレベルの低いガイドが前後にいる状態では不安であり、レベルは上げてほしい。
 - ・ 正確な情報共有ができる技術は必須であろう。
 - ・ 知床財団からの情報提供はあるのか？
 - ◇ （行政から）

出没状況など、できるだけ共有していく。財団固有の情報がそれほど多いわけではないが、むしろシステムとしてゲート施設での情報共有が確実にできる。
 - ・ 昨年の実験では、実質的に五湖で活動しているガイドが認定されているが、H22年春から想定されている引率者の正式募集開始では、経験者でない人のエントリーも有り得る。引率者のレベルが混在することが予想される。
 - ・ 判断のできない引率者とは組めない。五湖の地形を熟知していることは必須である。
 - ◇ （行政から）

行政提案のルールの悩みは、「引率者のレベルを明文化して定義できない」というところから、異なるレベルの引率者が混在することが予想されるスタート時点では、安全よりの基準で「遭遇したら引き返し」を提案した経緯がある。
 - ◇ レベルの定義と、そのための研修内容については、是非提案をいただきたい。

- 認定制度

- ・ 応募要件からガイド経験が外れていることにより、未経験者のエントリーが危惧される。
- ・ 実験での応募要件から「有償のガイド経験」のみを条件から外し、知床五湖での活動を30日行ったことがある、等で実質的に経験者を対象としたらどうか。
- ・ 入口広くしても、義務となるステップを多くして、実質的に対応したらどうか。

3) 地域としての取り組み

- 認定主体は五湖の利用のあり方協議会
 - ・ 極めて先進的な取り組みであり、利用調整地区など行政側の制度だけでは完成せず、地域の総意で取り組む必要がある。
 - ・ ガイドも積極的に参加して、具体的な提案とすり合わせに協力すべきだ
 - ◇ (行政から)
協議会でも説明したが、引率者の認定主体は、協議会になる。引率者の認定について協議会において地域の総意として認定を進められるのであれば、行政として明文化しななければならない部分を少なくできるかもしれない。

4) 今後について (行政より)

- 平成22年度の実験
 - 認定レベルを具体化するには、実績を積み上げていくことも重要。そういう意味で22年のヒグマ活動期実験はある程度長い期間やる必要がある。
 - 今まで閉鎖していた6・7月に入ることになる。どのような頻度でヒグマと遭遇するかは、正直やってみないとわからない。
 - 実験の実施方法については、引率者部会で詳細を詰めていきたい。
- 引率者の募集
 - 引率者については1年前に募集し養成を始める。H23年春のスタートに間に合わせるために当初想定されていたH22年春からの正式募集ではなく、平成23年の制度スタートから正式募集も開始するという考え方もある。それまでは現在の実験参加ガイドの皆さんを対象に、研修やレベルの向上・確定を図っていき、最終的には、そのプロセスで確定した認定レベルや研修をもとに、H24年度以降に広く外部の方に引率者としての門戸を開くという進め方を検討してみたい。
- 協議会
 - 1月中には開催予定。利用適正化計画の骨子案を協議いただきたい。この際、引率者認定や基本ルールの詳細の部分は外して、別途の検討に委ね、それ以外の内容で計画を策定することを提案したい。